

うたごよみ

曾於文藝

「題字」

末吉文化協会会員
瀬戸口 淳 民氏

俳句

末吉俳句会

城址の主のごとく梅の咲き

児玉 典子

クレソンのほろ辛き味春を噛む

古藤 まゆみ

春誘う風は梢にそつとりの

原口 サエ子

大隅俳句会

幽玄の域に近づく花一樹

岩重 みどり

里山に芽立ちの雨の降りつづく

川南 ミホ

菜の花の群咲く土手や子等の声

吉川 ツミ

短歌

末吉山茶花短歌会

腰かがめ洗濯板にごしごしと

衣類洗いし祖母逞しき

福嶋 宏晴

いつからか口癖となりゝまあいい

かゝ時々思うこれで良いかと

秋本 教子

雪と灰に辛卯歳の幕明きて早如

月も跳ぶ如く過ぐ

池田 明人

大隅短歌会

媼逝き三度の春は巡りきて廢家

の庭の梅の綻ろぶ

渡辺 哲夫

いつしかに散歩コースを変えて

居り新燃岳の見える場所へと

加塩 秀子

妹の孫のおゆうぎ会に招かれて

シッポの匂う肩を並べる

竹内 娃子

財部短歌会

スーパ―に高く積まるる米数多
食料難の時代は遙けし

瀬戸口 芳子

「これ何ぞ」よく見渡せば原風

景ただ灰色に染まりしのみ

祝迫 道雄

庭先の梅の開花を確めて一人微

笑む朝のひととき

富山 治雄

友の死を信じがたくも信じねば

南無阿弥陀仏と小さく唱ふる

児玉 次雄

木枯らしの風音猛る無人駅手摺

り頼りに降りる階段

川俣 若

流れ落つ新燃岳の降灰は生さざ

ま見せんとまたもせり上ぐ

井上 澄子

還暦を祝ふ教へ子声合はせ校歌

を唄ふ少年のやうに

杉村 リカ

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

でしとつ 大変な時代 凜と舵ず取れ

日本丸

古川 一幹

グルメ時代 母上の味じゃ

け忘れつ

森山 厚香

鈍び女房あ 時代の流行いな

追付かじ 浜田 一好

大隅薩摩狂句会

カロリどま 計算なし食た

バイキング

津留 群志

旅帰い大儀き顔どま

しやならじ 西山 美代子

旅の連れ朝から飲んで

守ゆさせつ 黒木 義士



さくら (旧岩北駅前)